

風刺画で101年生き続けた雑誌

“Fliegende Blätter”

穂満 美恵*

『フリーゲンデ・ブレッター』（Fliegende Blätter）は1884年11月7日に、ドイツのミュンヘンでブラウン&シュナイダー社（Braun&Schneider）によって創刊されたイラスト入り風刺雑誌である。その発行は（この種の雑誌では最長と思われる）約100年間、つまりほぼ一世紀も続いた。その滑稽で風刺の効いた絵はドイツのみならず、外国でも人気を博した。この週刊誌を読むことで私達は、当時の人々の生活を垣間見ることができる。

19世紀前半、ドイツ以外のヨーロッパ諸国ではもう『フリーゲンデ・ブレッター』以前に絵入り風刺雑誌は登場していた。その代表的なものとして二つの名前を挙げることができる。一つはフランスでフィリポン（Charles Philipon, 1806～1862）が1832年から発行した『シャリヴァリ』（Le Charivari）で、七月王制期にルイ・フィリップを痛烈に笑い飛ばしたため、何度も検閲に引っ掛かった。フィリポン自身のほかにドーミエやグランヴィルら著名な画家が、容赦のない、しかしユーモアたっぷりのイラストを提供した。一方『パンチ』（Punch, or the Charivari）は1841年ロンドンで創刊された。内容は『シャリヴァリ』同様、イギリスの政治から風俗までを皮肉たっぷりに扱っているものの「上品さ」も兼ね備えていた。執筆者、画家の顔触れは実に華やかで、サッカー、『不思議の国のアリス』の挿絵で有名なジョン・テニエル、コナン・ドイルの伯父で妖精画も描いたりチャード・ドイルらが参加した。また、日本では『くまのプーさん』で知られているA.A. ミルンが副主筆を務めたこともある。『パンチ』

*ほまん・みえ／大学院文学研究科博士後期課程在学（助手兼任）

の影響は日本にまで波及し、横浜の居留地でイギリス人画家チャールズ・ワーグマンに1862年『ジャパン・パンチ』を創刊させ、風刺絵を意味する日本語「ポンチ絵」を誕生させるに至った。

しかしヨーロッパの大国で上のような風刺雑誌が出回る一方で、当時のドイツではまだ『シャリヴァリ』や『パンチ』に匹敵する出版物は見当たらない。そこで当然の成り行きとして、ある出版社は考えた。このドイツでもひとつイラスト入り風刺雑誌というものを作ってやろうじゃないか、と……。

雑誌を刊行するうえでブラウン&シュナイダー社が木版印刷技術を持っていたことは大きな利点だった。実のところドイツでは、少し前まで木版画はほとんど忘れられていた。木版画は線が粗く、細かい絵を再現できないという理由から、長らく銅版画に取って代わられていたのである。しかし19世紀に入るとイギリスの木版画家トマス・ビュイックが開発した新技法がその流れを変える。横びきの版木を使ったビュイックの木口木版画によって、細かい線を邪魔していた繊維の問題は解決されたのである。ドイツに再び木版印刷の時代をもたらしたのはライプツィヒのJ.J. ヴェーバー社だった。1833年にこの出版社から創刊された『プフェニッヒ・マガジン』(Pfennig-Magazin)が大成功を収め、1843年には『ライプツィヒ・イラスト入り新聞』(Leipziger Illustreirten Zeitung)が後に続いた。

そのような成功をほかの多くの出版業者は指をくわえてただ見ていたが、ブラウン&シュナイダー社は違った。共同経営者の一人であるカスパー・ブラウン(Kaspar Braun, 1807~1877)はミュンヘンの芸術アカデミーを卒業後、パリに渡り木版画の工房で二年間修行を積み、ビュイックの木口木版技術を身につけていたのである。ミュンヘンに戻ったブラウンはさっそく木版画製作所を立ち上げ、イラスト入りの作品を発行しては成功を収めた。その間フランスで習得した技術から、より線的な独自のスタイルを編み出した。その後新しいパートナー、書籍商で執筆家のフリードリッヒ・シュナイダー(Friedrich Schneider, 1815~1864)とともに出版社を始めた。ブラウン&シュナイダー社は木版印刷によって低いコストの大量生産を実現させ、雑誌を低価格で販売することができた。値段が安け

れば買い手が増え、売れ行きも伸びていくのは当たり前のことである。

『フリーゲンデ・ブレッター』は1885年まで木版によって印刷された。1885年5月からは木版に代わって電気版、網版、亜鉛版が使われるようになった。このような印刷技術の変遷は勿論、雑誌の中身に影響を与えた。はじめは素朴で質素だった週刊誌のイラストがだんだん上品で洗練されたものへと変化している。

『フリーゲンデ・ブレッター』が登場したとき、ドイツでは依然として19世紀はじめの反動政治による厳しい検閲が続いていた。この週刊誌でもそのような状況をふまえて、はじめは政治に対する風刺は控えめだった。また、芸術都市ミュンヘンを擁するバイエルンで検閲の対象となったのは、政治的なものよりも宗教的なもののほうが圧倒的に多かった。そのため『フリーゲンデ・ブレッター』に多少の粗相があっても、当局が特に取り締まることはなかった。しかもバイエルン王国の役人、フランツ・フォン・ポッチ（Franz von Pocci, 1807～1876）が代表的なメンバーに加わっていたことから、当初はこの風刺雑誌がお上からにらまれる存在でなかったことが分かる。

この週刊誌が登場した1844年はビーダーマイヤー時代の後半にあたる。ビーダーマイヤーという言葉は1900年以降、ウィーン会議が開かれた1815年からドイツ三月革命が起こった1848年の間の家具様式に対して使われ、その後その時代全体をさすようになった。実はこの言葉の誕生には『フリーゲンデ・ブレッター』が深く関わっている。バーデン・ヴュルテンベルクの小都市ラールの判事、ルートヴィヒ・アイヒロット（Ludwig Eichrodt, 1827～1892）は1855年から1857年まで雑誌に詩を連載したが、そのときのペンネームはビーダーマイヤーといった。ビーダーマイヤー時代とはウィーン会議後の反動体制に対して政治的興味を失い、日々の生活の平安に喜びを見いだす小市民の時代とされている。このような思想は『フリーゲンデ・ブレッター』が当時、政府にとって無害だったことと一致するように思える。

ここで雑誌の名前の由来について考えてみよう。Fliegende Blätter、これは宣伝用のチラシを意味するFlugblätterからきている。このようなチ

ラシはドイツでは古くから存在し、テキストと絵で人々を啓蒙したり、奮い立たせたり、決起させたりした。グーテンベルクの活版印刷の発明以後、宗教改革のような時代の変動期には必ずこの種のチラシが出回った。この言葉が『フリーゲンデ・ブレッター』の由来になっていることに深い意味はないのだろうか。検閲をうまく免れていたこの風刺雑誌は本当に、政治的なことから距離を置いていたビーダーマイヤー時代の典型だったのだろうか。確かに体制に対して『フリーゲンデ・ブレッター』は鋭い風刺を浴びせることを避けた。しかし日常生活、社会風俗といった一見無害なネタを扱いながら、実は個人の世界に埋没する小市民的態度に警笛をならしていたのではないだろうか。実際人々はまもなく1848年に勃発するドイツ三月革命に向けて目を覚まさなくてはならなかったのだ。

ベルリンで始まった革命はドイツ各地に飛び火し、それにともなってカールスバートの決議以来続いていた検閲も次々に廃止された。風刺的な諸雑誌とともに『フリーゲンデ・ブレッター』も政治的な問題を遠慮なく扱うようになる。三月革命が結局のところドイツ統一に失敗した後もしばらくは、人々の政治的関心が高まったせいで風刺雑誌の勢いは止まらなかった。しかし1854年、厳しい検閲が再開されると『フリーゲンデ・ブレッター』も生き残りを計って政治色を弱め、風刺の対象は再び市民生活の日常に戻った。

この雑誌ははじめは月に2、3号ずつ不定期に出版され、60号で「週に一回発行」という宣伝を出して週刊誌となった。半年ごとの予約購読を行い、（おそらく大抵は予約購読をした書店から）一号ずつ買うこともできた。雑誌の読者層についても少し考えてみよう。予約購読を申し込んだのがもっぱら書籍販売業者だとすると、ばら売りで購入する読者は書店のある都市か都市近郊に住み、安価とは言っても生活費に余裕がある中流階級以上の市民と想定することができる。ちなみに一冊12クロイツァーという値段は、当時の牛肉1.3ポンドに相当する。

1844年に出版された創刊号は8ページだったが、これは『フリーゲンデ・ブレッター』の形式として定着する。その内容や構成は時代によって変化するが、必ず1ページ目の上部分にはタイトルを冠した絵（図1）が

載っている。それに続いて挿絵の付いた短編小説が載ることが多かった。大抵は連載もので、内容は奇想天外な話、心温まる話、冒険談など様々だが喜劇的結末に関しては一貫している。残りのページは詩、判じ絵、クイズなどが掲載されたが、なんといっても雑誌の売り物である風刺絵、戯画の占める割合が高かった。短い文章が添えられている絵もあれば、全く絵だけのものも珍しくない。絵物語『マックスとモーリッツ』の作者、ヴィルヘルム・ブッシュ（Wilhelm Busch, 1832～1908）のように複数の絵を連ねた、現代漫画を思わせる絵物語形式の作品もしばしば見受けられる。大きさは小さいものから、大きいものまで、ときには1ページまるごと使うものまであった。評判の良い画家は何号か続いて採用され、更に人気を集めた作品はシリーズ化され、長期にわたって掲載された。

検閲が強化されたためにトルコで出版された（？）際のタイトル

図 1

『フリーゲンデ・ブレッター』に絵が多いことは実際に見てみれば分かるが、だからといって当時のドイツ人が文字を読めなかったと考えるのは早急だ。19世紀のヨーロッパにおいてドイツの識字率は、他国に比べ圧倒的に抜きん出ていた。これは漫画が溢れている現代の日本で、もはや文盲率など話題にならないことを考えれば不思議なことではないだろう。たとえ読み書きが出来たとしても、絵が理解の手助けをすることは昔も今も変わらないのだ。しかしそのために出版社は良い画家を探さなければならない。そして『フリーゲンデ・ブレッター』は既に著名であった画家、作家の獲得以外に、新人の発掘も怠らなかった。その結果前述のポッチ、ブッシュのほかには童話の挿絵でも有名なモーリッツ・フォン・シュヴィント (Moritz von Schwind, 1804～1871)、ピーダーマイアーを代表する画家カール・シュピッツヴェーク (Carl Spitzweg, 1808～1885)、ヴィクトール・フォン・シェッフェル (Victor von Scheffel, 1826～1886)、ロタル・メッゲンドルファー (Lothar Meggendorfer, 1847～1925) らが雑誌に参加した。そして忘れてはならないのが編集者ブラウンとシュナイダーだ。二人はブラウンが絵、シュナイダーが文を担当して雑誌を代表する人気シリーズの一つ『バイゼレ男爵とその家庭教師アイゼレ先生のドイツ周遊記』(Des Herrn Barons Beisele und seines Hofmeisters Dr. Eisele Kreuz- und Querzüge durch Deutschland, 図2, 口絵5参照)を生み出した。これは二人の旅人がドイツや周辺の代表的な都市を巡る珍道中を、風刺をちりばめつつおもしろおかしく描いたものだ。この連載は当時のドイツ各地の様子を生き生きと今に伝えている。

ブラウン&シュナイダー社は『フリーゲンデ・ブレッター』の好調な売れ行きを見るとさらなる利益を狙った。出版社のもう

一つの柱である『ミュンヘン一枚絵』（Münchener Bilderbogen）シリーズに、雑誌で好評だった作品を再利用したのである。「一枚絵」（Bilderbogen）は文字通り一枚の絵入りの刷りもので、ドイツでは中世から民衆の間に広まっていた。まだ書物や雑誌が流通していない社会で、一枚絵は主に聖人画を扱い、世俗のカトリック普及に大きな役割を果たした。19世紀になるとベルリン北部の小都市ノイルピンで出版された一枚絵が名を広める。このノイルピン一枚絵は風刺画はもちろんのこと、その時の事件や自然災害、グリム兄弟の民話から双六など、絵を中心にA3大の紙に印刷された教養と娯楽のための一枚刷りの絵草紙だった。その後1849年に始まったミュンヘン一枚絵は間もなく北ドイツの商売敵と肩を並べるようになった。

W・ブッシュの『名人芸』から。雑誌掲載時のタイトルは『新年の演奏会』（Ein Neujahrskonzert）だった。 図3

『フリーゲンデ・ブレッター』に載った人気作品を使えば、ある程度の売り上げが見込めることは当然だが、利点はそれだけではない。当時、作家は作品に対して原稿料を一度しか受け取らなかった。出版社は同じ作品ならば何度印刷しても、改めて掲載料を払う必要はなかったので、一度原稿を買ってしまえば使いたい放題だったのである。例えばミュンヘン一枚絵で最も人気が高かったブッシュの『名人芸』(Virtuose, 1868, 図3)は1912年までに35版を重ねたが、1865年にすでに雑誌に掲載されたものなのである。彼の50編の一枚絵は535万5千部という総発行部数を記録したが、このほとんどが『フリーゲンデ・ブレッター』に見受けられる。また、一枚絵にとどまらず、1884年からは雑誌の人気作品を集めた選集『フリーゲンデ・ブレッター暦』(Fliegende Blätter-Kalender)の出版も始まる。出版社は非常に安い買い物ができたが、作家たちの懐にはわずかな収入しか入らなかったというのは全く皮肉な話だ。

『フリーゲンデ・ブレッター』の発行部数は、その人気とともに推移した。初めの年は4600部だった年間発行部数が、1869年には12500部、1870年には14000部、1887年は85000部まで伸び上がった。1903年には91500部が発行されたが、そのうち10000部はアメリカに輸出された。1928年になって雑誌はメグゲンドルファー主宰の『メグゲンドルファー・ブレッター』(Meggendorfer Blätter)に統合され、名称もそれに変わった。やがて1944年この雑誌も廃刊となり、『フリーゲンデ・ブレッター』はついにその長い歴史に幕を閉じた。この週刊誌が消え去って久しいが、その名前はいまだに忘れ去られてはいない。それはここに100年にわたる当時の社会の脚色のない記録をたどることができると同時に、現代社会に通じるものが発見できるからではないだろうか。そして何よりもユーモアあふれる素晴らしいイラストが今も変わらず読者の目を楽しませるからなのである。

(請求番号 P726/2//D)

図1 Nr.1, Bd.1, 1844. Nr.574, Bd.14, 1856.

図2 Nr.101, Bd.5, 1847.

図3 Wilhelm Busch, Samtliche Werke I.Hg.von Rolf Hochhuth.
München 1982.S.289~291